

# 聴覚障害者に関する障害認識についての調査分析

— 手話通訳者を対象とした調査結果をもとに —

## A Study of Sign Language Interpreters' Recognition of Deaf and Hard of Hearing People

原 順 子

Hara, Junko

### 要旨

聴覚障害は外見では分からない障害であり、また聞こえ方、失聴時期等の多様な障害実態があり、かつ誤解を受けやすい障害であるといわれている。そこで日頃から聴覚障害者のコミュニケーション保障および情報保障に携わる手話通訳者を対象に、聴覚障害者についての障害認識を問う調査を実施した。その結果、コア・カテゴリーとして出現数の多い順に、【聴覚障害者独自のコミュニケーション】【聴覚障害は情報アクセス障害】【ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】【理解困難な障害】【オーディズム：聴者至上主義】【手話コミュニケーションの特徴】の6つが生成された。【聴覚障害者独自のコミュニケーション】【聴覚障害は情報アクセス障害】の出現数が多いのは、手話通訳という業務上の理由からであることは推測できる結果である。また、【ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】が生成されたことは、わが国においてもろう文化の理解が定着してきているという実態が明らかとなった。

キーワード：聴覚障害者、障害認識、手話通訳者、ろう文化、質的調査

## 1. 研究背景と問題意識

障害の社会モデルが登場し WHO による ICF（国際生活機能分類）にもそれが反映され、障害に対する捉え方は近年においては随分変化してきている。だが障害認識は本当に変わってきているのだろうか。マジョリティの非障害者に比べれば、社会的にマイノリティである障害者は日々の生活で生きづらさを感じている方はまだまだ多いのではないか。障害の中でもコミュニケーション手段が音声によらない、視覚言語である手話や筆談などを使用する聴覚障害者に対する障害認識はどうだろうかというのが、本稿の問題意識としての着眼点である。

障害に対する認識の変化については、障害は社会の価値観や制度など様々な要因により変容もする。廣野（2009）が「青い芝の会」における知的障害者観の変容について紹介しているように、実際が変わっていくものであると捉えることに異論はないであろう。

本稿でいう障害認識とは、対象となる障害をどのように理解するかといった障害の捉え方と考える。同様な用語としては「障害の理解」「障害者観」「障害に対する視点」などであり、また当事者の立場から言えば、「障害の受容」「障害の自覚」という用語にも近い意味合いである。この障害認識という用語は、小田（2003）によると、多くのろう教育分野で使用される用語であり、障害に対する特定の認識のスタイルを表す語として、「障害についての理解と対処を含む、聴覚障害者児の積極的な社会参加と適切な自己像の形成を目指す本人および関わり手の認識的営み」と説明している。このように障害認識は聴覚障害児教育において一般的に使われているが、聴覚障害児のみならず聴覚障害者に関わる人々にも援用することも意義あるものと考え本稿で使用する。

認識を表す英語表記である awareness は、「(あるものについて) 気付いて [自覚して] いること」の意味であり、昨今、外国文献で散見される英語表記の“Deaf Awareness”は、ろう者であるという意味を自覚して認識することと解釈できる。本稿では、聴覚障害当事者のみならず、小田のいう「関わり手の認識的営み」も対象とする故に、英語表記では“Recognition”としている。障害認識は時代とともに変化してきているというのは周知のとおりであるが、障害の社会モデルが登場したことはその最たるものといえよう。社会を占める多数派の解釈が代表的な障害者観となるのは自明の理である。聴覚障害の障害者観の変遷については、Wax（1995）によるろう者へのまなごしの史的変遷<sup>1)</sup>や、Lane（1999 = 2007）が専門的文献で紹介されたろう者の性格傾向を偏見で満ちた誤った理解をしていると指摘した<sup>2)</sup> ことなど、現在からすれば大きな誤解であろう聴覚障害者に関する過去の認識がある。これらの障害認識は現在の障害認識からすれば聴覚障害者にとっては不名誉なことであり、大きな誤解である。そこで本稿では、聴覚障害についての障害認識の実像を明らかにするために以下に示す調査を実施した。

## 2. 研究の目的

聴覚障害者に対する障害認識を検証するために、聴覚障害者のコミュニケーション保障および情報保障において重要な役割を担い、日々手話通訳という業務を通して聴覚障害者と関りが深い手話通訳者を対象に調査を実施することにした。

手話通訳者の資格には、手話通訳士、社会福祉法人全国手話研修センターが実施する全国手話検定（1級～5級）、NPO 手話技能検定協会が主催する試験に合格することで取得できる手話検定（1級～7級）、各自治体による手話養成講座修了生などがある。手話通訳士は国家資格ではないが省令の定める公的資格であり、聴覚、言語機能又は音声機能の障害のため、音声言語により意思疎通を図ることに支障がある身体障害者とその他の者との間の意思疎通の確立に必要とされる手話通訳を行う者である<sup>3)</sup>。手話通訳士となるには、年1度行われる

手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）に合格して登録資格要件を有する者が、社会福祉法人聴力障害者情報文化センターに手話通訳士として登録を受けなければならない。手話通訳士試験は1989年から始まり、2017年11月2日現在で手話通訳士として登録しているのは、全国で3,522人である。

手話通訳者が日常の通訳業務において接している聴覚障害者を、どのように障害認識しているのかを明らかにすることを研究目的として、以下の手順で調査を実施した。

### 3. 研究の方法

#### 3-1. データ収集の方法

2016年6月から10月の間に筆者が手話通訳者を対象にワークショップを4回行った際に、以下のような方法で調査を実施した。

まず糊つきメモ用紙（商品名ポストイット）を調査対象者である手話通訳者に30枚程度配布し、「「聴覚障害者」についてよく知らない聴者に対して、あなたはどのように説明しますか？」という問いかけをし、メモ用紙1枚につき1つの内容を書き込むように依頼した。言葉で指示するだけでなく、パワーポイントで文字に示して調査を行った。

メモ用紙に記載する際の注意事項として、1) 聴覚障害の特性や、生活習慣など何でも思いつくことを書いてください。2) 考えられるだけたくさん書いてください。3) 1枚の紙に1つの説明を書いてください。例、手話でコミュニケーションする。といった3点のお願いをした。また、聴覚障害者を想起する材料として2例をパワーポイントに示した<sup>4)</sup>。

1つ目の事例：ある会社で働いているAさんは、第一言語は手話です。会社の人事課の方が、「Aさんについて困っています」と、相談に来られました。Aさんは上司に対して挨拶する時も、友達のようににこっと笑って手を挙げるだけ。筆談で仕事を指示しても、通じないことがある。周りの人がどんなに忙しくしていても、自分は時間になったからと帰ってしまう。周りへの気遣いができず、人間関係を壊してしまうこともある。困っています……。あなたは人事課の方に、Aさんについてどのように説明しますか？

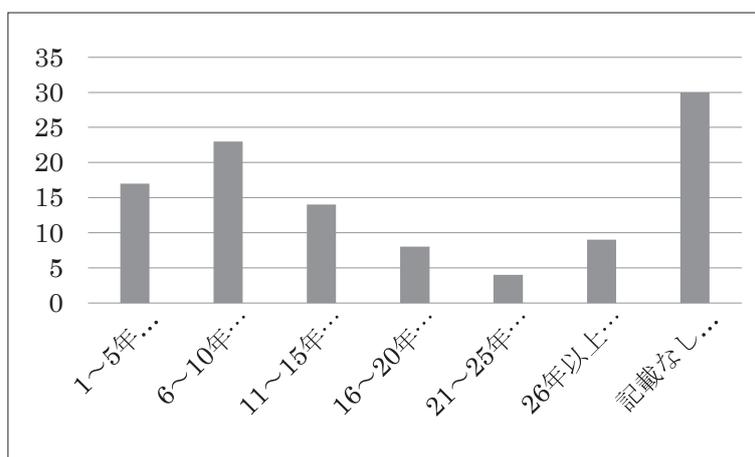
2つ目の事例：ご近所の回覧板が、自分の家に届けられていないというBさん。どうやら自分の家だけとばされていて、見るができない。近所の役員に苦情を言うと、「あなたは見てもわからないから」と言われたと、相談に来られました。あなたはご近所の方たちに、Bさんについてどのように説明しますか？

メモ用紙に書くために要した時間は、研究対象者の書くスピードを見ながら時間を決めましたが、平均して約15～20分くらいであった。この作業はワークショップとして行ったので、書くことを終えた後は、受講者同士で意見交換を行った。

### 3-2. 調査の対象者

メモ用紙への記載終了後には、①仕事の内容（職名&年数） ②聴覚障害者への相談業務歴の有無（ある or ない）③年齢（〇〇歳代） ④取得している資格名についての記載をしてもらうようにパワーポイントに示し依頼した。メモ用紙を提出した調査対象者は、全員が手話通訳士有資格者であり、105名であった。調査対象者の概要は、以下の通りである。

①仕事の内容は多岐にわたっており、設置手話通訳者、登録手話通訳者、派遣コーディネーターといった手話通訳に関わる業務もあれば、本務がジョブコーチや聴覚障害者の当事者団体の職員、公務員といった手話通訳業務が本務ではない調査対象者もいた。手話通訳業務の経験年数は記載なしが多かったのは残念であるが、6～10年が23人で一番多く、研究対象者の中で一番経験年数が多い人は39年であった（図1）。手話通訳士の資格制度ができる前からの経験年数であるのは言うまでもない。

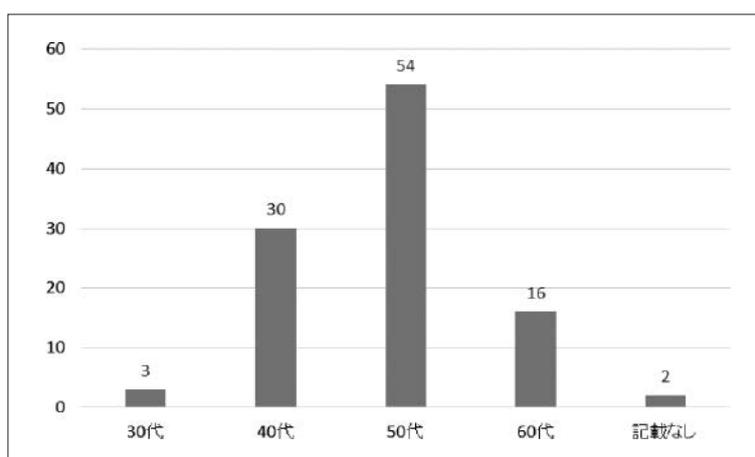


（図1）手話通訳業務の経験年数

②聴覚障害者への相談業務歴は、「ある」が68人、「ない」は35人、「記載なし」が2人であった。手話通訳者は通訳業務の他に聴覚障害者からの相談を受けることが多いという印象があるが、研究対象者の6割強に相談業務歴があった。

③年齢は、30代3人、40代30人、50代54人、60代16人、記載なしが2人の合計105人であった（図2）。性別は問わなかったが、圧倒的に女性が多い。

④手話通訳士以外の取得資格名はさまざまな資格名が書かれていた。相談援助専門職である社会福祉士取得者は5人、精神保健福祉士は2人であった。他には、介護福祉士、言語聴覚士、保育士、ヘルパー2級といった資格も僅かではあるが含まれていた。



(図2) 年代別調査対象者数

### 3-3. 分析方法

メモ用紙の回収後、書かれている内容はすべてパソコンに入力しデータ化した。回収したメモ用紙は875枚であったが、内容を吟味すると、1枚に複数の内容が記載されているものがあり、1枚に1つの内容になるようにデータ資料を修正した。その結果、メモ用紙の数は1,134枚になった。更に内容を詳細に分析していくと、書かれた内容が意味不明なもの、書かれた内容が未完成のものや個別ケースのみに該当する内容などもあり、それらを削除した結果、有効なメモ用紙の枚数は936枚となった。

分析方法は質的調査法の1つである内容分析を採用し、データが膨大なためPC分析ソフトのMAXQDA12を使用して分析を行った。

分析の手順は、有効と考えられるメモ用紙の内容を最小単位として1つの文章すなわち1枚のメモ用紙を記録単位とし、この記録単位を意味内容の類似性に従い分類(「サブ・カテゴリー」)していき、さらに内容の抽象度を増すために同様の作業を繰り返し(「カテゴリー」)、最終的に共通の内容を「コア・カテゴリー」として命名した。「サブ・カテゴリー」「カテゴリー」「コア・カテゴリー」については、研究対象者のメモ用紙の記述全体の中での出現数と比率を算出した。

質的分析においては分析者の恣意性を極力排除し分析者の主観を最小限にするため、MAXQDA12を使って複数回分析をおこなった。さらに分析の信頼性を確保するために、聴覚障害者を対象に相談支援を行っている専門職者と社会福祉学を専攻している大学院生との2名によるメンバー・チェックを実施した。

### 3-4. 倫理的配慮

前述したように、調査終了時にはメモ用紙に書かれた内容を筆者が研究に使用したい旨を説明し、メモ用紙を提出してもよいと考える人のみ机に置いて退室するように声かけをした。

そのため、メモ用紙を置いて退室した人は研究に協力の意思を示していると判断した。調査対象者の匿名化をはかるため、メモ用紙の回収は受講生が退室してから回収した。

メモ用紙に書かれた内容およびデータ化した資料の取り扱いには注意を払い、テキストデータはUSBメモリーに入れ、保管には嚴重の注意を払った。調査分析が終了し論文形態での公表後は、記入されたメモ用紙とデータ類は破棄する。

なお、本調査研究は、筆者が所属する日本社会福祉学会倫理指針に基づき実施した。

## 4. 研究結果

分析結果は表1に示す内容となった。56個のサブ・カテゴリー、17個のカテゴリー、6個のコア・カテゴリーが生成され、出現数の多い順に上から記載した表作成を行った。

手話通訳者からみた聴覚障害者に関する障害認識について、調査結果から作成した表1をもとに、各コア・カテゴリーを構成するカテゴリーとサブ・カテゴリーについて、コア・カテゴリーを中心に出現数が多い順に以下に説明する。コア・カテゴリーは【 】, カテゴリーは《 》、サブ・カテゴリーは〈 〉で示す。

生成されたコア・カテゴリーは、【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】【②聴覚障害は情報アクセス障害】【③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】【④理解困難な障害】【⑤オーディズム：聴者至上主義】【⑥手話コミュニケーションの特徴】の6つであった。

一番出現数が多かったコア・カテゴリー【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】は302枚の記述からなり、総枚数の32.3%であった。構成されるカテゴリーは、《手話は日本語とは違う故の大変さがある》《手話通訳者の役割は重要》《コミュニケーション時は相手を見なければならぬ》《話の内容が十分に理解できているかどうか確認が必要》の4つであった。

カテゴリー《手話は日本語とは違う故の大変さがある》は、4つのサブ・カテゴリーである〈日本語の読み書きが苦手〉〈手話と日本語は違う言語〉〈抽象的な言葉や話は苦手〉〈日本語は読める〉から生成された。〈日本語の読み書きが苦手〉の具体的記述内容は、「日本語（特に長い文）が苦手な方もいる」「文章を読んだり、書いたりする事が苦手な人が多い」等であった。〈手話と日本語は違う言語〉は、「聞こえない人にとって日本語は外国語のようなもの。彼らの第一言語は手話で、日本語は第二言語」「手話と日本語は違うので、日本語のニュアンスが上手く伝わらないことがあります」等であった。〈抽象的な言葉や話は苦手〉は、「まわりくどい言い方や比喩は通じにくいので、より直接的に指示をした方がわかりやすい」「丁寧な遠まわしな言い方ではなく、ポイントを絞った簡潔な言いの方が理解しやすい」等であった。〈日本語は読める〉は、「文章がわからない訳ではない」「書いたものは読む事ができる」等であった。

カテゴリー《手話通訳者の役割は重要》は、3つのサブ・カテゴリーである〈筆談は工夫

(表1) 手話通訳者からみた聴覚障害者に関する障害認識

【コア・カテゴリー】	出現数 %	《カテゴリー》	出現数 %	〈サブ・カテゴリー〉	出現数		
①聴覚障害者独自のコミュニケーション	302 32.3%	手話は日本語とは違う故の大変さがある	121 12.9%	日本語の読み書きが苦手	76		
				手話と日本語は違う言語	28		
				抽象的な言葉や話は苦手	13		
				日本語は読める	4		
		手話通訳者の役割は重要	120 12.8%	コミュニケーション時は相手を見なければならない	36 3.8%	筆談は工夫が必要	60
						コミュニケーション手段は多様	33
		話の内容が十分に理解できているかどうか確認が必要	25 2.7%	手話通訳者がいればコミュニケーションできる	27	相手の表情を見て判断したり、口形を読む	22
						アイコンタクトが重要	12
						手話使用時は書くことができない	2
						分からなくてももうなずき分かったふりをする	19
②聴覚障害は情報アクセス障害	267 28.5%	情報が入りにくい	109 11.6%	分からなかったかどうか確認が必要	4		
				相槌は話を聞いているという意味	2		
				雑談が聞こえないので情報が入らない	50		
		聴覚障害者にとっては視覚情報が情報源である	107 11.4%	情報不足による弊害が大きい	51 5.4%	情報入手が困難	33
						生活音がわからない	26
						視覚情報が重要	67
						視野が広く、見る力はすごい	19
						目で見た情報しか入手できない	13
						視覚優位	8
						情報保障が必要	27
				社会の常識を知らない人がある	18		
				情報不足により誤解あり	6		
				独自のろう文化がある	44		
③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化	198 21.2%	ろう文化の存在の主張	98 10.5%	手話はろう者の言語	41		
				仲間意識が強い	8		
				聞く以外は何でもできる	5		
		共通の生活習慣や行動様式がある	66 7.1%	聴文化とは違う文化の特徴がある	34 3.6%	挨拶は手を挙げたり、アイコンタクトで行う	35
						視覚情報中心の生活様式	18
						振動などで情報を得る	13
						察することが苦手	13
						ろう者同士に上下関係がない	13
						固有の価値観をもっている	5
						人との距離感が違う	3
④理解困難な障害	75 8.0%	聴覚障害者は多様な存在である	45 4.8%	聞こえ方は多様	23		
				育った環境や受けた教育が多様	7		
				失聴時期は多様	6		
				言語獲得能力は多様	5		
				一人ひとり違う	4		
		誤解を受けやすい存在である	30 3.2%			誤解を受けやすい	15
						思い込みが強い	9
						外見ではわからない障害	6
						聴者に遠慮がち	15
						疎外感を感じている	10
⑤オーディズム：聴者至上主義	63 6.7%	マジョリティである聴者との関係性	38 4.1%	被害妄想的な受け止め方をする	8		
				聴者に劣等感あり	5		
				ろう学校は狭い社会	12		
		ろう教育には課題がある	16 1.7%	聴覚障害者はマイノリティな存在である	9 1.0%	十分な教育を受けていない人たちがいる	4
						家族の中でもマイノリティ	5
						聴者社会の中でマイノリティ	4
⑥手話コミュニケーションの特徴	31 3.3%	手話は明確な表現をする	23 2.5%	はっきりものを言う	12		
				ストレートな言い方が伝わりやすい	5		
				指で人を指す	4		
		手話は表現が豊かな言語である	8 0.9%			手話には曖昧な表現がない	2
						表現力が豊か	6
				表情が豊か	2		
計	936 枚 100%	計	936 枚 100%	計	936 枚		

が必要)〈コミュニケーション手段は多様〉〈手話通訳者がいればコミュニケーションできる〉から生成された。〈筆談は工夫が必要〉の具体的記述内容は、「筆談が苦手な人がいる。簡単なことのみ、文章は短くわかりやすく」「文章の意味がつかみづらいので、筆談する場合は短い文章や絵、図など入れると伝わりやすくなる」等であった。〈コミュニケーション手段は多様〉は、「コミュニケーション手段は手話、身振り、指文字、筆談などいろいろで、その人に合った手段を選ぶ必要がある」「コミュニケーション方法は人によって様々」等であった。〈手話通訳者がいればコミュニケーションできる〉は、「手話通訳が一番スムーズに情報をとれるという人もいます」「手話通訳制度を活用することができる」等であった。

カテゴリー《コミュニケーション時は相手を見なければならない》は、3つのサブ・カテゴリーである〈相手の表情を見て判断したり、口形を読む〉〈アイコンタクトが重要〉〈手話使用時は書くことができない〉から生成された。〈相手の表情を見て判断したり、口形を読む〉の具体的記述内容は、「ろう者と話す時は、正面を向いて話すと、口形や表情が総合的に見えて安心する」「聞こえない人は相手の顔や口形を見て話を理解します。会話をする時は必ず正面で顔を見て口形をはっきりとして話してください」等であった。〈アイコンタクトが重要〉は、「手話で話す時は目を合わせて話すことが大切だから」「ろう者の人は、相手の顔を見て話すので、相手の視線が合ってから話しかけること」等であった。〈手話使用時は書くことができない〉は、「書きながら手話で話すことはできない」「手話には書き言葉がない」であった。

カテゴリー《話の内容が十分に理解できているかどうか確認が必要》は、3つのサブ・カテゴリーである〈分からなくてもうなずき分かったふりをする〉〈分かったかどうか確認が必要〉〈相槌は話を聞いているという意味〉から生成された。〈分からなくてもうなずき分かったふりをする〉の具体的記述内容は、「分からないことも笑顔やうなずきで返事をする」「説明されていることが分からなくても、うなずいていることがある」等であった。〈分かったかどうか確認が必要〉は、「うなずいても理解しているとは限らないので、確認が必要」「理解しているか、伝わっているかの確認が必要」等であった。〈相槌は話を聞いているという意味〉は、「了解したの意味ではなく、相槌は相手の話を聞いてますという意味です」「聴覚障害者の相槌は話を聞いているという合図のようなもので、話を理解したという合図ではない」であった。

続いて2番目のコア・カテゴリー【②聴覚障害は情報アクセス障害】は267枚の記述からなり、総枚数の28.5%であった。構成されるカテゴリーは、《情報が入りにくい》《聴覚障害者にとっては視覚情報が情報源である》《情報不足による弊害が大きい》の3つであった。

カテゴリー《情報が入りにくい》は、3つのサブ・カテゴリーである〈雑談が聞こえないので情報が入らない〉〈情報入手が困難〉〈生活音がわからない〉から生成された。〈雑談が聞こえないので情報が入らない〉の具体的記述内容は、「周りの会話が聞こえないので、状況判断に不便が生じる時もある」「聞こえる人は自分が話題の中に加わっていても自然に聞こ

えてくる内容から情報をつかむこと、状況を理解することができるが、聞こえない人は難しい」等であった。〈情報入手が困難〉は、「耳から情報が入らず目からの情報だけなので、聞こえる人と比べて情報量が少ない」「情報が圧倒的に少ないです」等であった。〈生活音がわからない〉は、「人の声だけでなく生活環境音も入ってきません」「自分の出している音について気づいていない。ドアの閉め方、ノックの仕方、足音、食べる時の音など」等であった。

カテゴリー《聴覚障害者にとっては視覚情報が情報源である》は、4つのサブ・カテゴリーである〈視覚情報が重要〉〈視野が広く、見る力はすごい〉〈目で見た情報しか入手できない〉〈視覚優位〉から生成された。〈視覚情報が重要〉の具体的記述内容は、「後ろから話しかける時は、肩を軽く叩いたり、前に回り込んで視野に入ってから話す」「情報はすべて目から入れます」等であった。〈視野が広く、見る力はすごい〉は、「聞こえる人に比べて視野が広い」「観察力がすごくある。細やかな特徴までよく捉えている」等であった。〈目で見た情報しか入手できない〉は、「聞こえないので見ることで情報を得なければならず大変です」「目にふれていないものは、わからない」等であった。〈視覚優位〉は、「言葉のとらえ方が映像的・感覚的である」「見ることで理解する力が強い」等であった。

カテゴリー《情報不足による弊害が大きい》は、3つのサブ・カテゴリーである〈情報保障が必要〉〈社会の常識を知らない人がいる〉〈情報不足により誤解あり〉から生成された。〈情報保障が必要〉の具体的記述内容は、「情報障害なので、情報が入れば聴者と同じ」「きちんとした情報保障があれば、他の人と同じように動けます」等であった。〈社会の常識を知らない人がいる〉は、「耳からの情報が入らないので『知っていて当たり前』『常識』のようなことを知らない」「社会的なルールについての情報を受け取ってこれなかった」等であった。〈情報不足により誤解あり〉は、「情報不足による誤解を生じることが多い」「1つの情報を信じ込みやすいです」等であった。

3つ目のコア・カテゴリー【③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】は198枚の記述からなり、総枚数の21.2%であった。構成されるカテゴリーは、《ろう文化の存在の主張》《共通の生活習慣や行動様式がある》《聴文化とは違う文化の特徴がある》の3つであった。

カテゴリー《ろう文化の存在の主張》は、4つのサブ・カテゴリーである〈独自のろう文化がある〉〈手話はろう者の言語〉〈仲間意識が強い〉〈聞く以外は何でもできる〉から生成された。〈独自のろう文化がある〉の具体的記述内容は、「聞こえない人の独自の文化がある」「目で見える文化をもっている」等であった。〈手話はろう者の言語〉は、「手話でコミュニケーションする」「手話は見て伝えあう言葉です」等であった。〈仲間意識が強い〉は、「ろう者同士のつながりが強く、ニュースの伝わるスピードも早い」「ろう者間の関わりが強い」等であった。〈聞く以外は何でもできる〉は、「聞こえないことによる不便があるだけ」「耳が聞こえないだけ。他は、健常者と同じです」等であった。

カテゴリー《共通の生活習慣や行動様式がある》は、3つのサブ・カテゴリーである〈挨拶は手を挙げたり、アイコンタクトで行う〉〈視覚情報中心の生活様式〉〈振動などで情報を

得る〉から生成された。〈挨拶は手を挙げたり、アイコンタクトで行う〉の具体的記述内容は、「ろう者が笑って手を挙げるだけの挨拶にも、表情や手の振り方、スピード、タイミングにいろいろな気持ちがこもっている」「手話での挨拶は目を合わせ、笑顔で手を挙げる、会釈などあります」等であった。〈視覚情報中心の生活様式〉は、「聴覚障害者の家の中では音声の代わりに電気を用いて生活している。パテライト、お知らせ用の電気、ベビーシグナル」「会議、講習会の始まりなど、手を振ったり電気をつけたり消したり繰り返し合図する」等であった。〈振動などで情報を得る〉は、「ろう者が会議などでメモしている時に、視線をこちらに向けてもらうには、机を軽く叩いて振動で伝える」「人を呼ぶ時、机を叩いたり、床をどんどんする。肩をとんとんする。聞こえないが振動でわかる。気づく。」等であった。

カテゴリー《聴文化とは違う文化の特徴がある》は、4つのサブ・カテゴリーである〈察することが苦手〉〈ろう者同士に上下関係がない〉〈固有の価値観をもっている〉〈人との距離感が違う〉から生成された。〈察することが苦手〉の具体的記述内容は、「日本人でありながら感覚的には欧米人のよう。『察しの文化』は通じない。ストレートに伝えよう」「聞こえる日本人特有の察しの文化は通じにくい」等であった。〈ろう者同士に上下関係がない〉は、「手話には尊敬語や謙譲語がない事や、ろう文化では上下関係を教育されることが少ない」「あまり上下関係を気にしない。フレンドリーな面がある」等であった。〈固有の価値観をもっている〉は、「子ども時代に身についた固有の価値観をもっている」「固有の価値観をもっている」等であった。〈人との距離感が違う〉は、「アポなし、突然、家を訪ねてくる。年配者に多い」「友達のように接することは“親しみ”の表れ」等であった。

4つ目のコア・カテゴリー【④理解困難な障害】は75枚の記述からなり、総枚数の8.0%であった。構成されるカテゴリーは、《聴覚障害者は多様な存在である》《誤解を受けやすい存在である》の2つであった。

カテゴリー《聴覚障害者は多様な存在である》は、5つのサブ・カテゴリーである〈聞こえ方は多様〉〈育った環境や受けた教育が多様〉〈失聴時期は多様〉〈言語獲得能力は多様〉〈一人ひとり違う〉から生成された。〈聞こえ方は多様〉の具体的記述内容は、「聞こえないと言っても、少し聞こえる人、全く聞こえない人、言葉としてではなく、音としか入ってこない人等いろいろです」「聴覚障害といっても聞こえのレベルは様々である」等であった。〈育った環境や受けた教育が多様〉は、「成育歴や受けてきた教育、育った環境により、自分が聞こえないという事を受容できていない人もいる」「教育を受ける現場や場所が多様」等であった。〈失聴時期は多様〉は、「聞こえなくなった時期（先天的、幼少時、ある程度大きくなってから）は一人一人全く異なります」「生まれつき聞こえない人、出生後聞こえなくなった人など、さまざま」等であった。〈言語獲得能力は多様〉は、「言語獲得の時期やその質は人によって個人差が非常に大きいです」「育った家族、環境等により、言語習得についても人により様々」等であった。〈一人ひとり違う〉は、「聞こえない人にもいろいろな人がいます。一人ひとり違います」「聴覚障害者といっても一人一人違います。一人一人個性があります」等

であった。

5つ目のコア・カテゴリー【⑤オーディズム：聴者至上主義】は63枚の記述からなり、総枚数の6.7%であった。構成されるカテゴリーは、《マジョリティである聴者との関係性》《ろう教育には課題がある》《聴覚障害者はマイノリティな存在である》の3つであった。

カテゴリー《マジョリティである聴者との関係性》は、4つのサブ・カテゴリーである〈聴者に遠慮がち〉〈疎外感を感じている〉〈被害妄想的な受け止め方をする〉〈聴者に劣等感あり〉から生成された。〈聴者に遠慮がち〉の具体的記述内容は、「周りに手話のできる人がいないと、自分からコミュニケーションをとることを諦めてしまう」「手話の分からない健聴者に対して、相手の言う事が分からない、自分の言いたいことが伝わらないからと関わりを持つことに消極的になる」等であった。〈疎外感を感じている〉は、「健聴者の中に一人にいるのは辛いと思う方が多い」「日頃から疎外感をもっている」等であった。〈被害妄想的な受け止め方をする〉は、「聞こえないので、周りの人が笑ったりしていると、自分を笑っているように感じてしまう」「周りの人が集まって話をしていると自分には全く聞こえないため、自分の悪口を言っているのではないかと疑ってしまう」等であった。〈聴者に劣等感あり〉は、「聞こえる社会では、自分は劣っていると考える」「聞こえる人=何でもわかる人。自分より数段聞こえる人は優秀だと決めつけている人が多い」等であった。

カテゴリー《ろう教育には課題がある》は、2つのサブ・カテゴリーである〈ろう学校は狭い社会〉〈十分な教育を受けていない人たちがいる〉から生成された。〈ろう学校は狭い社会〉の具体的記述内容は、「ろう学校で教育を受けている場合、聴者の教育環境と違い、幼稚部から高等部までクラスメイトは同じ人」「テリトリーの狭さ、大体ろう学校卒業者は知り合い」等であった。〈十分な教育を受けていない人たちがいる〉は、「小さい時に日本語の教育を十分に受けられなかった人もいる」「子どもの時、十分な教育を受けられなかった方もいらっしゃいます。文字の読み書きのできない方には手話やホームサインでコミュニケーションすることもあります」等であった。

最後のコア・カテゴリー【⑥手話コミュニケーションの特徴】は31枚の記述からなり、総枚数の僅か3.3%であった。手話に関する内容であるのでコア・カテゴリー【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】に含めても良いと思われるが、【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】は多数派の聴者コミュニケーションに対する聴覚障害者のコミュニケーションを対峙させた内容でカテゴリー化しているのに対し、【⑥手話コミュニケーションの特徴】は手話に関する特徴を述べた記録で構成されているので別のコア・カテゴリーとした。構成されるカテゴリーは、《手話は明確な表現をする》《手話は表現が豊かな言語である》という2つであった。

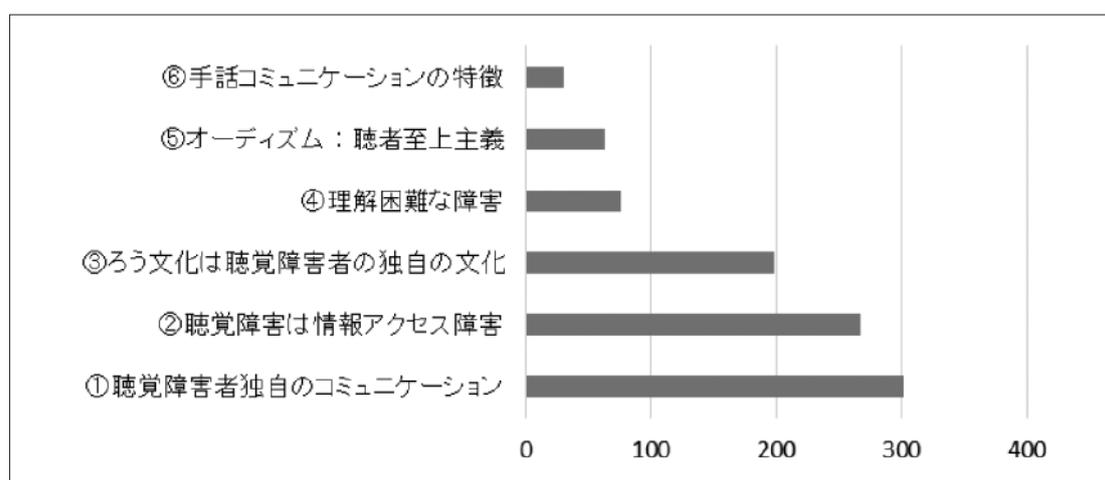
カテゴリー《手話は明確な表現をする》は、4つのサブ・カテゴリーである〈はっきりものを言う〉〈ストレートな言い方が伝わりやすい〉〈指で人を指す〉〈手話には曖昧な表現がない〉から生成された。〈はっきりものを言う〉の具体的記述内容は、「良くも悪くもストレート

トで個人的なことも聞く」「はっきりとした言い方。Yes・Noがハッキリしている」等であった。〈ストレートな言い方が伝わりやすい〉は、「ストレートに話すとわかります」「曖昧さがなくはっきりしている。～頃はなく〇月〇日とか〇時〇分」等であった。〈指で人を指す〉は、「対象を明確にするために目上の人にも指さしする」「人、物等、指をさすことが多い」等であった。〈手話には曖昧な表現がない〉は、「手話で話すと曖昧な表現がありません」「曖昧な言い回しは苦手です」であった。

カテゴリー《手話は表現が豊かな言語である》は、2つのサブ・カテゴリーである〈表現力が豊か〉〈表情が豊か〉から生成された。〈表現力が豊か〉の具体的記述内容は、「聞こえる人より身体で表現することが上手い人が多い」「表情や身振りがオーバーで、声の代わりに見て分かってもらえるように工夫している」等であった。〈表情が豊か〉は、「笑顔が素敵（表情が豊か）」「表情が豊か」であった。

## 5. 研究結果の考察

生成されたコア・カテゴリーは、出現数の多い順に、【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】【②聴覚障害は情報アクセス障害】【③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】【④理解困難な障害】【⑤オーディズム：聴者至上主義】【⑥手話コミュニケーションの特徴】であった（図3）。



（図3）手話通訳者からみた聴覚障害者の障害認識（コア・カテゴリー）

【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】が一番多いコア・カテゴリーとして出現したのは、調査対象者が手話通訳者であるという理由が考えられる。反対に一番出現数が少なかった【⑥手話コミュニケーションの特徴】も手話通訳に関するものであるが、受講生がすべ

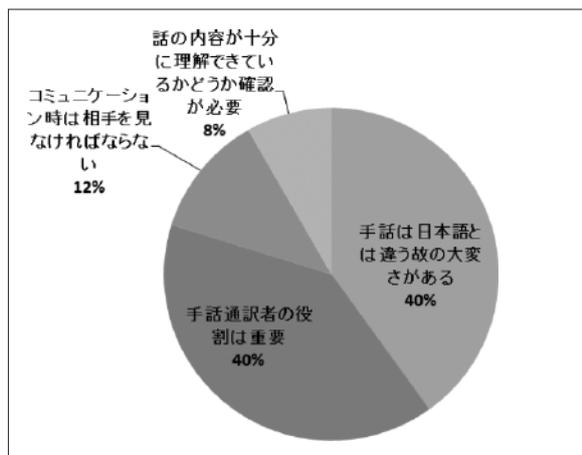
て手話通訳者である会場での調査のため、手話コミュニケーションについての説明の必要度が低下することになったのではないかと推測できる。

【③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】については、全体の約2割の出現率でろう文化を肯定的に記述しているのは筆者の予想に反し意外であった。一部の研究者たちによるろう文化に関する研究はあるものの、ろう文化についての否定的な議論が多く紹介され問題提議をしている文献<sup>5)</sup>などからも、日本においてはろう文化が肯定的には捉えられていないと思われるところであったが、本研究の調査結果からはろう文化の認識が関係者の間で広まってきていることが伺えた<sup>6)</sup>。

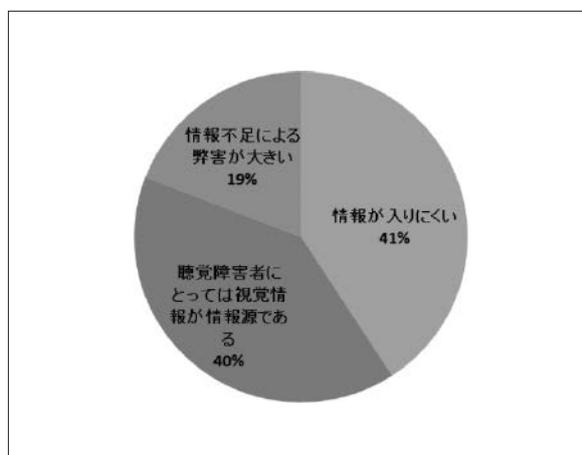
次に、【コア・カテゴリー】と《カテゴリー》との数的な割合を確認するために、各コア・カテゴリーをグラフ化した。(図4)から(図9)に示す。《カテゴリー》と〈サブ・カテゴリー〉のグラフ化は紙面の都合で省略する。

(図4) コア・カテゴリー【①聴覚障害者独自のコミュニケーション】を構成する4つの《カテゴリー》はいずれも重要な要素であるが、特に《手話は日本語とは違う故の大変さがある》に注目したい。英語やフランス語といった語学に関する通訳の場合は、例えば「英語は日本語とは違う故の大変さがある」とわざわざ言わなくても、誰もが理解していることである。手話については日本語とは違う言語であるというアピールのように理解できる。

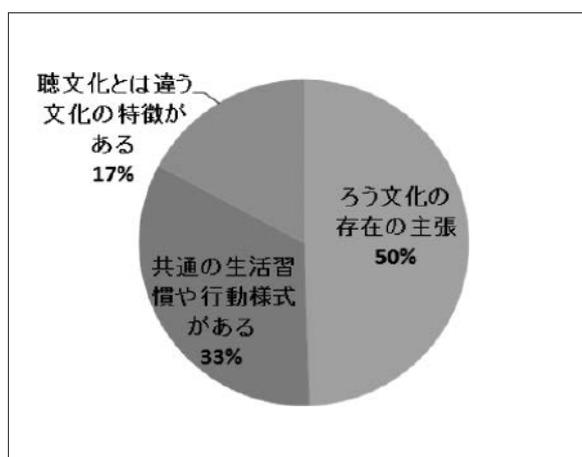
(図5) 【②聴覚障害は情報アクセス障



(図4) ①聴覚障害者独自のコミュニケーション



(図5) ②聴覚障害は情報アクセス障害



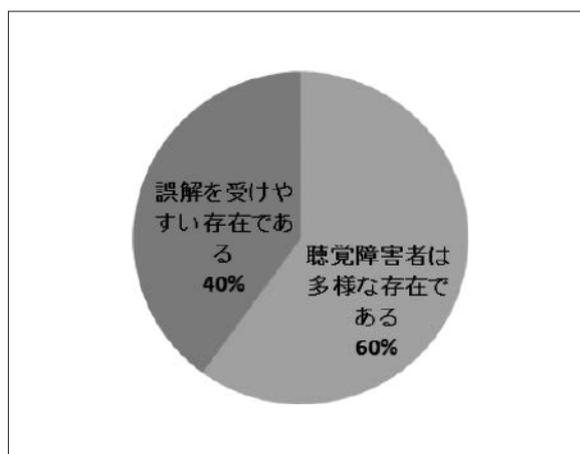
(図6) ③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化

害】については、聞こえないことで《情報が入りにくい》《情報不足による弊害が大きい》ということを改めて認識させられるものである。世の中にはたくさんの音情報が溢れ返っているといっても過言ではない。聴者は何気なく耳にする情報を入手し、その情報を自分のものとしているが、聴覚障害者はそうではない。聴覚障害者はIT 機器により視覚情報として入手しており、《聴覚障害者にとっては視覚情報が情報源である》。

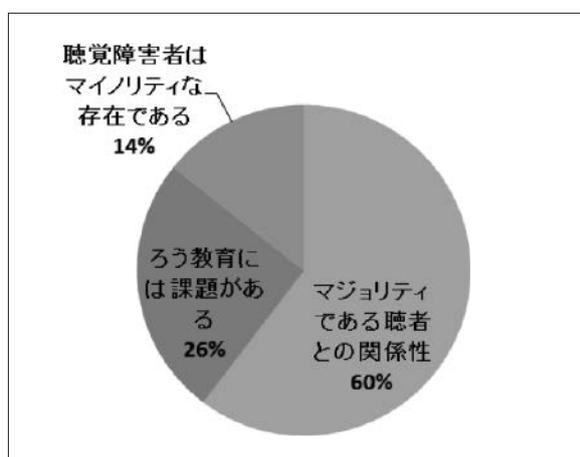
(図6) 【③ろう文化は聴覚障害者の独自の文化】であるが、前述したように出現数が3番目に多いコア・カテゴリーになるとは予想していなかった。聴覚障害者の障害認識としてろう文化を記述した手話通訳者が多かった事実は、通訳者として聴文化とは違う視覚重視の生活様式や共通の感覚といったことに常に直面しているからだと言えよう。何よりも手話が聴覚障害者の言語であるとの認識が、ろう文化を肯定する一番の理由だと推察できる。

(図7) 【④理解困難な障害】については、《聴覚障害者は多様な存在である》《誤解を受けやすい存在である》故に理解困難な障害といえる。筆者が聴覚障害ソーシャルワーカーを対象にインタビュー調査をした結果も、聴覚障害者の特性として「多様性」「マイノリティ」「わかりにくい」がキーワードとして抽出されている(原2015)。

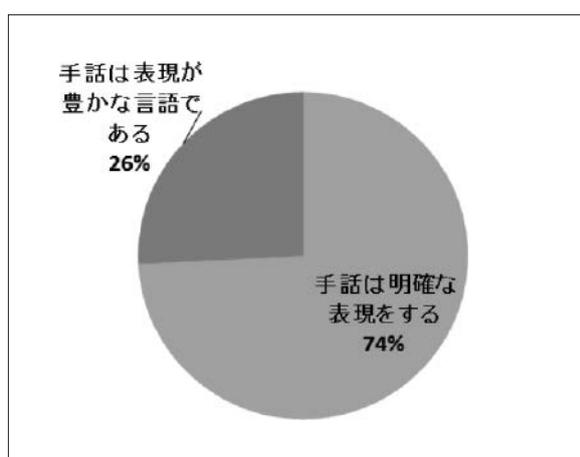
(図8) 【⑤オーディズム：聴者至上主義】は、多数派である聴者と少数派の聴覚障害者の関係性を示すものである。聞



(図7) ④理解困難な障害



(図8) ⑤オーディズム：聴者至上主義



(図9) ⑥手話コミュニケーションの特徴

こえることが当たり前とする社会の中でのマイノリティ優遇施策が求められる。

最後の(図9)【⑥手話コミュニケーションの特徴】は、手話通訳者としての手話についての説明である。音声言語とは違った特徴として、《手話は明確な表現をする》《手話は表現が豊かな言語である》は、手話は素晴らしい言語であるというメッセージと受け止めたい。

最後に、本調査の結果での出現数上位3つのコア・カテゴリーから、手話通訳者の聴覚障害者に関する障害認識をまとめると、「聴覚障害者は情報入手に関しては視覚情報に限るという情報アクセス障害であるが、手話という独自のコミュニケーション手段をもち、ろう文化という独自の文化をもつ人々である」となる。

## 6. 今後の課題

今回の調査は、手話を第一言語とする聴覚障害者に関する手話通訳者の障害認識を調査したものであり、すべての聞こえない聞こえにくい人たちを対象としたものではない。また、聴覚障害者に関わる専門職には手話通訳者以外にも多くある。そして何よりも聴覚障害者の障害認識を明らかにするには、聴覚障害当事者の障害認識をも調査する必要があるだろう。

今回の聴覚障害者の障害認識に関する調査結果が、10年後20年後にはどのように変化していくのかといった縦断的研究も興味深いものである。今回の調査で生成されたサブ・カテゴリーの中に「日本語の読み書きが苦手」「抽象的な言葉や話は苦手」「社会の常識を知らない人がいる」「思い込みが強い」「察することが苦手」といったネガティブな表現があるが、これらは聴覚障害者を取りまく環境や制度、教育などが変化するにつれて、ポジティブなものに変わっていくことを期待したいところである。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

本研究は、「大学におけるインペアメント文化を尊重する合理的配慮マニュアル作成に関する研究」(研究代表者:松岡克尚)学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)(研究分担者:原 順子)(平成28～30年度)課題番号16K04224の研究成果の一部である。

### 注

1) Waxは古代ギリシャ時代から現在までの歴史的視点に基づき、聴覚障害者がさまざまな見解をもって認識されてきたことを明らかにしている。例えば、アリストテレス学派の見解は「声を出さないこと＝知性の欠如」であり、聖書の見解には聞こえないことは恥辱の印とみなされていたこと、その後は疾病

モデル、文化モデルなどが登場する。

- 2) Lane は、過去 20 年間の心理学的測定により明らかにされたろう児、ろうの大人の傾向に関係する 350 以上の論文、本に基づくリストを作成し、その内容が「依存的、社会性の欠如、疑り深い、頑固、情緒的に未熟」といった誤った認識であることを紹介した。
- 3) 厚生労働省令第九十六号「手話通訳を行う者の知識及び技能の審査・証明事業の認定に関する省令」第 1 条に規定されている。
- 4) 研究対象者が聴覚障害者の実像を想起しやすくするために 2 例の具体像を示したが、筆者の予想に反し、日々の手話通訳活動において関わっておられる聴覚障害者をもとにたくさんのメモが書かれた。結果としてはこの 2 例は必要なかったと解釈している。
- 5) 2000 年に現代思想編集部が発行した『ろう文化』は、1995 年に木村晴美・市田泰弘による「ろう文化宣言——言語的少数者としてのろう者」に反論する論文が掲載されたものであった。
- 6) 本調査を実施したワークショップでは、筆者による障害の社会モデルや文化モデルの講義とともに、ポストイットのネガティブ表現をポジティブ表現に書き直す作業を研究対象者に行ってもらった。これらによるろう文化に関する記述数への影響も考えられるが、書き直し後の記述を削除した結果においても、コア・カテゴリー出現数の順位に変化はなかった。

## 引用文献

現代思想編集部編（2000）『ろう文化』青土社。

原 順子（2015）『聴覚障害者へのソーシャルワーク——専門性の構築をめざして——』明石書店。

廣野俊輔（2009）『『青い芝の会』における知的障害者の変容——もう 1 つの転換点として——』『社会福祉学』第 50 巻第 3 号, 18-28.

Lane, H. (1999) *The Mask of Benevolence Disabling the Deaf community*, Dawnsign press. (=2007, 長瀬 修『善意の仮面——聴能主義とろう文化の闘い』現代書館.)

小田侯朗（2003）「障害認識をめぐる研究の意義と本研究の位置づけ」聴覚・言語障害教育研究部聾教育研究室『聴覚障害児の障害認識と社会参加に関する研究 平成 13 年度～15 年度』独立行政法人 国立特殊教育総合研究所。

Wax, T. M. (1995) Deaf Community, *Encyclopedia of Social Work 19<sup>th</sup>*, NASW, 679-684.

## 参考文献

有馬明恵（2007）『内容分析の方法』ナカニシヤ出版。

舟島なおみ（2007）『質的研究への挑戦（第 2 版）』医学書院。

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して——』ナカニシヤ出版。

Klaus Krippendorff (1980) *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology* (=1989, 三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳『メッセージ分析の技法——「内容分析」への招待——』)。